

グループ紹介

声のたよりを送りつつけて

〈なぎさグループ〉

伊東市で朗読ボランティアをしているグループが「なぎさグループ」です。

七年前、市役所主催の朗読講習会がきっかけとなり、誕生しました。去年の講習会のあと、会員も増え、十数名が月一回、市の社会教育センターで録音活動を行っています。

月一回作成する情報満載のテープ「声のたより」をはじめ、録音図書は二百数十冊にもなります。これらのテープは市役所の福祉課にあり、目の不自由な方に貸し出され喜ばれています。が、もつと広く市民に知れ渡り、利用の輪がますます広がってほしいとのことです。

録音作業は、下調べや雑音による中断などで、できたテープの何倍もの時間を要する地道な作業ですが、仲間同士のつながりと励ましがあればこそ、続けてきたとのこと。これからも息長く続けていきたいと、皆さん意欲的でした。

連絡先 伊東市川奈一八三一一八

電話 〇五五七(4)三八四八

代表者 上原 明子



和やかな雰囲気の中で「学ぶ」

〈藤枝S.H.O.M.の会〉

初めて三歳児をもつ母親と子供を集めて、この夏三回にわたり、歌あり体操あり、料理ありの「楽しい子育てへのステップ講座」が開かれました。「時間をかけて準備をしてきました。」と張り切るのは、〈藤枝S.H.O.M.の会〉の十名です。

このメンバーは、「静岡県婦人の海外研修団員」の藤枝地区のOBです。今回の講座は、海外研修という体験を何かの形で生かしたいお役に立ちたい、地域に根ざすことができれば……という主旨で企画された、第一回目の活動なのです。

英語、音楽、体育、保育の先生、そして、ベテラン主婦等々、皆、個性と能力のある方ばかりです。子育てでも、大先輩ですが、「教えるだけでなく、私たちも、若いお母様たちから学びたいのです。」と謙虚です。

今後、月一回の例会で、悩める若い母親のための企画を練ってくださるでしょう。

連絡先 藤枝市前島二一三二五

電話 〇五四〇七四七四

代表者 澤入 敬子

本は友たち

〈読み聞かせ・赤い靴〉

心豊かな子供を育てよう。それには、本に親しむのが一番。そんなお母さん方の願いから始まった読み聞かせは、毎月一回引佐町立図書館で、低学年を対象に行われています。

「子供が喜ぶということが大切ではないかしら。」と迷い考えながら、面白さ、感動する心を大切に選書しています。

始めたからには中途ではやめられないと、会員の増減はありませんが、現在五名が交替でがんばっています。

「浜松など遠くに出かけたとき、『あつ、読み聞かせのおばさん。』と声を掛けてくれる子供がいます。そんなときは、『覚えていてくれたのか。続けていてよかった!』と嬉しく思います。その微笑は、手にした充実感を語ってくれていました。

子供たちが、本を友に巣立っていったら、なんて素晴らしいことでしょう!

連絡先 引佐町伊井谷六一〇一二

町立図書館

電話 〇五三五(4)二一一八

代表者 野沢 里子



バーバラさんの

Happy Life

磐田市見付在住

御主人 熊本啓一さん、長女 杏奈ちゃん
と3人家族。英語講師。



〈カナダから日本へ〉

私の名前はバーバラ・セントクレア。カナダ人です。四年前にカナダ・トロントの日本企業で働く日本人と結婚しました。結婚後、磐田市に夫の転勤とともに移りました。今年の三月には、杏奈という娘が誕生。杏奈という名前は、英語でもよく使われますし、世界中で通用する名前だと思っています。



〈私の姓について〉

よく私の姓について人にたずねられます。日本では結婚後、女性は男性の姓を名乗るからでしょう。カナダでは、結婚後も、もとの姓を続ける人が大勢います。時には夫の姓を追加する人もいます。例えば「セントクレア・熊本」というように。

〈私の仕事について〉

日本に来てからは、英会話講師として働いています。最初は英会話学校で教えていましたが、最近自分で経営したいと思うようになり、現在は英会話学校の会社設立準備に追われる毎日です。女性として思うのは、通常のビジネスである利益第一主義ではなく、お客である生徒さんへの温かい配慮を第一に考えています。

〈教育について〉

日本の教育が、よくマスコミに取り上げられます。残念なことに、私にもよく理解できない日本の教育システムがあります。でもそれらが、日本の文化の貴重な根幹となり、現在の日本が世界に誇れる経済の原動力となっているのでしよう。

けれども、北米と同じように、このような教育は、若い世代の人が、労働そのものに価値を感じない、又、嫌がるといった問題も起きます。また受験地獄は、失敗を必要以上に恐れてしまう、自信喪失のマイナス面をも生みだす原因と言えるでしょう。

〈日本の女性について〉

一九八〇年初頭より、日本の女性性は大きく進歩しました。男性の仕事と考えられていた分野が、女性へも開放されつつあります。人手不足のせいかもしれません。多くの女性は、家庭と職業の両立を目指していますが、女性にとっては、かなり大きな負担となります。まだ多くの人が、家庭は女性が守るべきだと考えています。最近読んだ記事に、政府は出生率低下に頭を悩ませていると載っていました。おそらく、働く女性の負担が軽減されない限り、その低下は続くのでしよう。

〈日本の印象について〉

私の日本の印象ですか？ 私は日本が大好きです。ここでの快適な生活や、大きな問題がない事が最高です。でもひとつだけ、大きな障害があります。それは言葉(日本語)です。この日本語がもっと上手になれば、日本での生活はさらに楽しいものとなるでしょう。

—ねっとわあくらいぶらりい・本との話—



新潮社

三人の子を産んでいる。最初の子の時には自分に対して、お腹の子供に対しても必要以上に神経質になった。二人目の時は、何に対してもあきれられるくらいに無神経だった。三人目を産む前に、この本を読んで出産に対する意識が変わったように感じた。

神戸にあるパルモア病院は、産婦人科と小児科を合わせた周産期教育病院だ。院長の三宅廉先生は小児科を専門とし、産婦人科と小児科の谷間にあって顧りみられなかった新生児を救うことをライフワークとしてきた。

「産みの苦しみ」は母親だけのものだと思いきんで来た。けれど赤ちゃんにとっても、出産は人生最初の最大の危機なのだという。産む母親の苦しみより、生まれ出ずる子の苦しみがはるかに大きいかもしれないが、胎児は苦しみを伝える言葉を持たない。そ

れゆえに温かな母の胎内から、狭い産道を通り外の世界へと出た瞬間の「オギャー」の第一声は重大だ。いつ泣き、どう泣いたのかが生涯を左右するほどだと三宅先生は言う。

乳児死亡の八・九割が新生児の出産のときであり、身体障害のほとんどすべてが胎内と出産時の前後、いわゆる周産期で決定される。だが、新生児に手を差し伸べる医学は軽視されてきた。三宅先生は障害のある子供を診るたびに、なぜこんな障害があったかという根本を知らねばならないと思ってきた。それには小児科が産科と協力して胎内のときから知ること。後になって病気の原因を振り返る「回顧の医学」から百八十度転換した「前方視医学」へ。行き届いた医療と産科小児科合同体制、母親教室の充実、そして大人として認められる十五歳までのフォローアップ、これがパルモア病院の特長だ。断片的な医学から科学プラス心の病院をめざすパルモア病院。

これから子供を産むであろう若い友人に、この本を贈ろうと思う。ファッショナブルなマタニティ雑誌もいけれど、きつとそれとは違った感動を受けると信じているから・・・。

新刊紹介



「いぶし銀の女たち」 美尾浩子著
大きな時代の壁に敢然と立ち向かう明治の女の生き様に、いとおしさとあこがれを感じる。女性の意識は確実に変化してきたが、人として心豊かに生きることが学びたい。

三創 一、二〇〇円



「自分探しの本棚」 木下明美著
京都新聞の家庭欄に一年間連載された「おんなの本棚」をまとめた読書エッセイ。「女性問題は男性問題でもある」との視点から選んだ本たちは自分探しの手がかりになるかも。

ワイメンズブックスストア松香堂 一、六〇〇円



「幸せのライフ・メニュー」 菅原明子著
美しく、楽しく、幸せに生きるためのくらし方を考えてみたい。著者の生い立ちを交えながら、人間の幸せにつながる「食生態学」を分かりやすく教えてくれる。

廣済堂 一、二〇〇円



「母の花束」 第一集・第二集 静岡出版文化会編
『母と生活』に掲載されたへ母の作文コンクール優秀作品が、二冊の本に編まされた。子育てや仕事の合間に書かれた一篇一篇が、母として女として、胸に沁みるような珠玉の作品集となっている。

静岡教育出版社 各八〇〇円



「私のしあわせ人生」 宇野千代著
九十歳を越えても、好奇心と可愛いらしさをもち続け、日々の中で上手な幸せさがし。そのさわやかで楽しい人生の随筆集が、私たちを勇気づけてくれる。

毎日新聞社 一、二〇〇円

女性の生き方は大きく変わる??

女性の時代、男も女も能力しだいと、マスコミでは日常茶飯事の報道です。

でも、ここでちょっと考えてみなきゃ。

企業戦士や働きバチが、男から女に変わるだけなら何にもならない。

ストレスはたまるだろうし、仕事と家事・育児の両立どころか、自分自身の健康管理も危ないんじゃないかな。

不自然な働き方はストップしましょう!

これからの女性は、もっと自分を大切に、欲張りになりましょう!

仕事だけの人にならない。

子育ても楽しみながら、家庭も快適にまわりたい。趣味もある。人生をエンジョイしたい……と声高々に唱えましょう!

ゲルニカ

絵を見るのが好きだ。美術館の絵のまわりの、あの張りつめた空気に触れると心が震える。

忘れられない絵といえば、スペインの首都マドリッドのプラド美術館で見たピカソの『ゲルニカ』だろう。『ゲルニカ』は一九三七年ドイツがバスク地方の古都ゲルニカを爆撃した時の様子を描いている。どちらかというとピカソは私の好きな画家ではない。だから『ゲルニカ』を見るためにプラド美術館別館へ足を向けた時も、単に有名だから見てみようくらいの軽い気持ちだった。

「やっぱり女じゃ……」

「女のくせに……」

いろいろなご意見を耳にするでしょう。

今が大事な時ですよ。

女性一人ひとりが、ちよつとずつ背のびしてほんの一センチでも幅広く行動すれば、家庭も、職場も、世の中も、変革されるんじゃないかしら。

時には考えもしなかった自分に出会う、自分再発見の楽しさを味わいながら、自己実現の旅に出かけましょう。

一人じゃできないことも、仲間が集まると不思議な力がわいてくるもの。

女性のネットワークを広げましょう!

(目ざめ始めたワーキングウーマン)

ホプリ



けれど『ゲルニカ』の絵の前に立った時、

衝撃的な何かを感じた。絵の中のたくさんの動物たちが何かを訴え泣いていた。モノクロに近い色使いが戦いの悲惨さをより深く物語っていた。絵は作者の主張であり、目ではなく心で絵を見ることがわかった気がした。

美術館の帰り道に買い求めた『ゲルニカ』のポスターはいまだに私の部屋のすみに置かれたままだ。インテリアにするには少しこわすぎる。結局、私の部屋を飾っているのはバリエで見た美しいルノワールだ。

(圭)

出会い

人生の中で、運命的な素敵な出会いがある。私は、編集員になってからの半年の間に、そんな「人との出会い」を経験した。

恩師との出会い。ある講習会で偶然に、三十数年前の幼稚園時代の先生にお会いした。

「ねつとわあく」のテーマにぴったりの先生。後で取材をお願いすることになるのだが、その取材によって、「先生と園児」から、「女性と女性」に急速に接近する。対等に♪、先生の半生をお聞きできることに、ただ感激。

ある新聞社の女性記者との出会い。主婦でありながら、社会参加し活躍しているその女性性は、「私は、何も立派でなんか無いのよ。」と謙そんする。短い語りの中で、三人の子の母という共通の部分をつつけて、勇気づけられた。個人差はあるにしても、毎日の生活の中で、時間・体力・能力を上手に使いこなせば、一つのことを継続できる。そして、自立への道も開けることを教えられた。

編集員の皆さんとの出会い。知らず知らずのうちにできた役割分担。広く、やさしくお互いを見守る編集員たちとの出会いの中で、知らなかった私の小さな個性を発見した。

そして、最後に、子供たちの意外なたくましさに出会ったこともつけ加えたい。子離れできず家にかじりついていて私を、励まし、協力し外に出してくれたい子供たち。

どれも、これも、勇気を出して飛び出した者にしか経験することができない「出会い」の喜び。あなたも、外気浴してみても……。

(K)

2年度編集員紹介



鈴木三千代
(水窪町)

初めての仲間、取材、編集、勉強……県庁への長い道のりの中で、楽しさと苦しきの両方を味わっています。一年間、実りあるよう過ごしたいと思います。



新井 博子
(長泉町)

編集への字も知らず、好奇心と元気の良さだけがセールスポイントの私。原稿用紙との悪戦苦闘の中から、自分というものを見つめ直してみたいのです。



須山 照子
(浜松市)

編集員になれたつかの間の喜び、不安、あせり、励まし、インタビュー、そして編集。やっと発行できました。あきらめなかったから…。だから今、とっても、とっても嬉しい。



土屋 圭子
(静岡市)

まだ、子どもが小さく思うように行動することがむずかしい。でも、今だからこそ考えたいことや言いたいこともある……。



鈴木 和子
(福田町)

出会いを重ね、一つひとつ新しい驚きと感動で、私の目は洗われたようです。これからの自分に期待できそうです。



萩原 邦子
(静岡市)

勉強不足は痛感しましたが、「何事にも感動」を胸に、のんびり前進してきました。そして、やっと私たちの小さな本ができるのです。周りの励ましとおだてに感謝します。

女性のための情報誌

「ねっとわあく」第17号

平成3年1月

編集・発行 静岡県県民生活局 婦人課
〒420 静岡市追手町9番6号
☎ <054> 221-3122

表紙デザイン

県浜松繊維工業試験場 小杉 思 主 世